

言葉の力

2025.3.24

京都の嵯峨に住む染織家志村ふくみさんの仕事場で話していた折、志村さんがなんとも美しい桜色に染まった糸で織った着物を見せてくれた。そのピンクは、淡いようでいて、しかも燃えるような強さを内に秘め、はなやかで、しかも深く落ち着いている色だった。その美しさは目と心を吸い込むように感じられた。「この色は何から取り出したんですか」。「桜からです」と志村さんは答えた。素人の気安さで、私はすぐに桜の色びらを煮詰めて色を取り出したものだろうと思った。実際はこれは桜の皮から取り出した色なのだった。あの黒っぽいゴツゴツした桜の皮からこの美しいピンクの色が取れるのだという。志村さんは続けてこう教えてくれた。この桜色は、一年中どの季節でもとれるわけではない。桜の花が咲く直前のころ、山の桜の皮をもらってきて染めると、こんな上気したような、えもいわれぬ色を取り出せるのだ、と。

私はその話を聞いて、体が一瞬ゆらぐような不思議な感じにおそわれた。春先、もうまもなく花となって咲き出でようとしている桜の木が、花びらだけでなく、木全体で懸命になって最上のピンクの色になろうとしている姿が、私の脳裡にゆらめいたからである。花びらのピンクは幹のピンクであり、樹皮のピンクであり、樹液のピンクであった。桜は全身で春のピンクに色づいていて、花びらはいわばそれらのピンクが、ほんの先端だけ姿を出したものにすぎなかった。

これは、大岡信さんの『言葉の力』の一節である。以前は、中学校の国語の教科書に掲載されていた。小学校から中学校に移り、1年目のことだった。教科書に、この作品が載っていた。授業をしなければならない。だが、あの頃の私には、この文章のよさがわからなかった。そんな状態で授業をするのである。どう進めていいのか、皆目見当もつかなかった。

同じ学年を担当する先輩の国語の先生がいた。その先生の授業を見せてもらうことにした。教材は、自分の前に立ちはだかっている『言葉の力』である。目から鱗ともいうのだろうか。こうやればいいのか。中学校の国語の授業というのは、こういうものなのか。その先輩の先生は、見事に授業を進めている。生徒は、生き生きと考えている。自分もこういう授業がしたい。そう思った。憧れのようなものを抱くようになった。

それからである。この文章を何度も繰り返し読んでみた。すると、だんだんとわかってきた。そういうことか。授業は、決してうまくいったとはいえない。だが、この文章は、今でも好きである。今ならば、この作品のよさがわかる。先日、あることをきっかけに、この文章を思い出すこととなった。

(次号に続く)